

# 日本化された台湾？ 中国化された台湾？あるいは 日本化され中国化された台湾？ : 文化マッピング と文化政策の弁証法的関係（下）

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 王 向華, 邱 ?欣, 鈴村 裕輔[翻訳]   |
| 出版者 | 法政大学国際日本学研究所  |
| 雑誌名 | 国際日本学   |
| 巻   | 9   |
| ページ | 49-65   |
| 発行年 | 2012-03-30  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15002/00022646">http://doi.org/10.15002/00022646</a> |

# 日本化された台湾？ 中国化された台湾？ あるいは日本化され中国化された台湾？ —文化マッピングと文化政策の弁証法的関係（下）

王 向 華  
邱 愷 欣  
（翻訳：鈴木裕輔）

## 凡例

- [1] 本論文は、Wong Heung-wah and Yau Hoi-yan, *A Japanized, Or Sinicized Taiwan, Or Both?: The Dialectic Relationship between Cultural Mapping and Cultural Policies*, 2009. の後半部分の全訳である。  
前半部分は、『異文化としての日本』（国際日本学研究叢書 11、2010）に掲載されている。
- [2] 翻訳に際しては、原文のイタリック体で表記された個所に傍点を付した。
- [3] 本文における [ ] は原著者による補足を示す。
- [4] 本文の最後に掲載された文献表の翻訳について、陳毅立氏（法政大学）の協力を得た。

## 「日本化された台湾？ 中国化された台湾？ あるいは日本化され中国化された台湾？ —文化マッピングと文化政策の弁証法的関係（上）」

### 目 次

- 1 序論
- 2 文化政策から文化マッピングへ
- 3 公衆衛生の政治
- 4 葬儀と結婚式の政治

## 5 国民党政権（1945～1980年代後半）

1949年の内戦に敗れた結果、蒋介石は台湾に逃れ、中華民国という一党独裁国家を建設した。現地の人々の生活の在り方にとって不可欠であった日本的な要素は、日本の植民地支配を悩ませなかったのだから、当然ながら国民

党政権を混乱させた。現地の文化の一部としてのこうした日本の痕跡を理解するどころか、国民党政権は現地民を、日本帝国主義の「奴隷」、日本の文化によって「汚された」と考えた<sup>[55]</sup>。さらに、共産党に本土を奪われたことで、国民党政権は中国全土の唯一の政権としての正当性を確立することを強く希望した。上に述べたように、いわゆる「正当性」は古代中国の国家以来の歴史的、文化的、言語的、種族的拡張に属する。国民党の支配がそのような古代中国の国家からの広がりによって当然生ずるものであることを証明し、それによって中国全土を支配することを正当化するために、国民党は台湾（中華民国）がより「中国」らしく見えるように、あるいは、より正確には全中国の「代表」に見えるようにする努力を行った<sup>[56]</sup>。

まさにこのような背景によって、1950年代初期の台湾における蒋介石の国造りでは、一連の脱日本化政策が強調されたのである。1949年、国民党はすぐに台湾の日本風の行政部門を廃止した<sup>[57]</sup>。日本の雰囲気が入り込んだ道や建築物、施設は、中国の土地の名前や漢族や大中国の概念に基づいて改名された<sup>[58]</sup>。日本語と閩南語は群衆が通りで会話するときを使用することが禁止され、標準中国語が社会的な価値を普及させるための唯一の媒介としての「国語」とされた<sup>[59]</sup>。日本名を与えられた皇民（帝国化された臣民）は、中国名に復することが義務付けられた<sup>[60]</sup>。日本からのマスメディアの輸入や日本の出版物も禁止された<sup>[61]</sup>。しかし、蒋介石による中国本土奪還の可能性が低下し<sup>[62]</sup>、1960年代後半から米国の支援が徐々に細ったことが、国民党政権の正当性の危機を引き起こした。台湾を含む全中国の単独の政府であるという政治的な正当性を再確立するために、国民党政権は、古代中国の国家以来の多様な広がりや遺産を証明するために全力を挙げるしかなく、そのため、脱日本化から中国化へと、すなわち中華文化復興運動へと移行せざるを得なかったのである。

## 6 中華文化復興運動（1966～1990年代前半）

中国本土の文化大革命は、中華文化復興運動、すなわち、台湾に伝統的な中国の価値を保ち、それによって台湾が中国全体の「唯一の」正当な支配者を演ずることを約束する運動の口火を切るに最良の機会を、蒋介石にもたら

した<sup>[63]</sup>。孫逸仙と孔子を通して自らを周公、文王、湯、舜、禹、堯という中国の伝統的な賢人たちに結び付けることで、蒋介石は「道統」を發明することさえ行った<sup>[64]</sup>。これらは全て、彼が中国全体の「唯一の」正当な後継者であることを証明し、それによって、台湾を含む中国全土の唯一の政府としての中華民国の政治的正当性を告げるためのことであった。アレン・クーンが適切に観察したとおり、台湾の愛国主義者における「中国らしさ」の考えは「高度な文化と神話の共有」という人工的な意味に言及した<sup>[65]</sup>。それは、「第一に人間と神々を結び付け、社会と神話の中の起源を結び付けた、より広範な宇宙論的な考え方による序列化」<sup>[66]</sup>を前提とする、一種の選りすぐられた中華思想である。国民党は公式には入植者ではなかったが、実際には、中華文化復興運動は、伝統的な洗練された道徳倫理、家族イデオロギー、対人関係を強調することで、中国の倫理によって現地の人々の（再）植民化を試みたのである。ここで留意すべきは、中華文化復興運動が「（再）植民地化」であるということである。何故なら、すでに言及したとおり、こうした中国の家族イデオロギーや倫理のほとんどは、衰退の途上にあつたとはいえ、以前から台湾に存在していたからである。つまり、中国文化の精髓を抽出することを通して、国民党政権は自らの正当性を補強しようと試みたのである。

中華文化復興運動は、「道徳教育」、「中国の伝統的な古典の復興」、「実際の演技」、「市民の徳化」、「女性の統制」を含む五つの段階であった。学校では、1970年代初頭から「生命と倫理」や「公民権と道徳性」といった授業が初等、中等教育で教えられるようになった<sup>[67]</sup>。つまり、これらの授業の内容は、「四維八徳」、すなわち、礼、義、廉、恥、忠孝、仁愛、信義、和平を中心に展開されたのである。四つの太い綱と八つの徳は、自己陶冶を通して得られる社会の調和と、息子は家長に孝行し、市民は国家に愛国心を抱くという父権的な価値を強調する、一連の道徳的な規準であることが分かる。

教室の外では、文学の発展と中国の古典の再版に力が入れられた。二、三の例を挙げるなら、『論語』、『孟子』、『詩経』が、注を付されて再版された<sup>[68]</sup>。国民の自覚を促すために、愛国歌の歌唱大会が地方自治体で開催された<sup>[69]</sup>。さらに、中国文化に関する話題を扱った随筆大会や弁論大会が定期的に開かれた。同様に、演説や作文を議論するための公開討論会や同輩が集まっ

研究集会も開かれた<sup>[70]</sup>。地方自治体と社会組織は「模範青年」、「模範母親」、「模範教師」などを定期的に表彰した<sup>[71]</sup>。中国画、京劇、篆刻、民族音楽、民族衣装を中心とする全国規模の展示会や実演会が台湾の数多くの都市で開催された<sup>[72]</sup>。1967年の大晦日には、1965年に建設された故宮博物院で、「倫理」、「民主主義」、「科学」の意味を市民に伝えることを目的として、数多くの伝統音楽の楽器とともに、古代の聖人の肖像画、二十四孝子を展示した「中華道統文物特別展」さえ開催された<sup>[73]</sup>。しかし、中華文化復興運動の最重要計画は、市民全体の徳化であった。

## 7 台湾の市民の徳化

1968年、国民党は、市民に道徳的な規準を強制し、それによって人々の生活を統制しようとした「全国市民生活指針」を公示した<sup>[74]</sup>。四維八徳に再び焦点を絞ったこの指針は、国の機関や社会組織、学校、近隣住民、家庭に配布された<sup>[75]</sup>。

「全国市民生活指針」の最高の主題のひとつが、「愛国心」と「親孝行」であった。「全国市民生活指針」の通則の中で、最初の四つの規則が国家に対する忠誠と関係している。第1条では、国旗が掲揚されているときは敬礼しなければならないとされている。同様に、国家斉唱ないし吹奏の場合は、起立する必要がある（第2条）。第3条では、国旗、国父ないし総統の肖像画を大切に扱うことが求められている。第4条は、総統への敬意を表明するために起立し、歓迎するとしている。

親孝行については、第6条で、朝晩、両親、年長者、教師に挨拶すべしとされる。子は、外出と帰宅の際に、両親に挨拶せねばならない。両親が呼ぶときは、子は、要望に応じるために遅滞なく反応し、親のもとに行かねばならない<sup>[76]</sup>。第66条は、外出する必要があるときには、子は親に詳細を報告することさえ要求し、予定よりも遅れて帰宅する場合にも、同じく報告することを求めている。第32条は、子と年少者に対して、両親と年長者が食べ始めるまで食事を開始してはならないと命じている<sup>[77]</sup>。同様に、第74条は、子ないし弟妹は、両親と兄弟に従うよう指示し、もし両親や兄弟と意見が違うときは、間接的に示

さなければならないとする。

親孝行と密接に結びついているのは、年長者に対する「礼儀」である。第77条は、両親や年長者と一緒に歩くときは、一步下がることを要求する<sup>[78]</sup>。第5条では、年少者は年長者に黙礼するように定め、年長者の目の前で足を組んではならないとする。第8条は歩行、着席、待機の場合の順番を指定する。すなわち、年少者は、前の位置に対して後、左に対して右に立たねばならないのである。第9条は、直接的な眼差しによって年長者に対して尊敬の念を示すことを要求する<sup>[79]</sup>。第73条は、年少者が年長者に対立したり、あまつさえ異なる意見をもつことがないように説示する<sup>[80]</sup>。

礼儀が、他人や友人に対する「愛情」や「親切」でもあることは明らかである。第7条は義理に優先する。何かを頼むときには「お願いします」と言うように求め、協力や世話を受けるときには「ありがとうございます」と言うように求められた<sup>[81]</sup>。第18条は、公共の場では法律に従うこと、随意に喫煙してはならないこと、ごみを投棄してはならないこと、芝生を踏みつけてはならないこと、花を折ってはならないことを定めている<sup>[82]</sup>。第68、69条は、他人と生活する間は自制するように命じている。すなわち、もし必要なら協力を申し出、そして室内での動きに警戒しなければならないのである<sup>[83]</sup>。さらに、第13条では、友人を利用することよりも友人に利用されることがよりよいと勧めている。第94条は、友人や他人への思いやりの感情を育むことを求める。これらの規則の下で、人は自由な個人ではなく、公共の秩序を維持し、他者を助けるために自己を犠牲にするための驚くべき水準の自制を常に指導される、大集団の一員なのである。

「全国市民生活指針」の主たる目的は、家族イデオロギー、道徳倫理、対人関係、とりわけ年長者と年少者、台湾の人々の友人同士の関係を補強するということであつたといえる。これらの方法は、誰もが両親に従い、年長者を敬い、規則に従い、互いに思いやり、道徳的で慎ましく生き、それによって中国本土との戦争に備えるような、高度に統制された国家を作ることであるという林の指摘は適切と思われる<sup>[84]</sup>。台湾の支配をより強めようとする試みの中で、蒋介石は、性差による階層化を達成するために、女性にやや重要な役目を割り当てた。

## 8 女性への問い

1966年、地方女性協会は、女性にも「四維八徳」を実施することを強く要望した<sup>[85]</sup>。同様に、中華家族協会は、台湾の女性に次のようなことをうながす覚書を公表した。すなわち、(1)「固有道徳」に従うこと、(2)子どもに愛国心を教え、舅と姑、年長者への親孝行を見せるために家にいること、(3)猥褻な文書や暴力的な素材がない、良好な環境を子どもに与えること、が公表されたのである<sup>[86]</sup>。

この覚書から、結婚は夫婦の愛情ではなく、子どもを徳化し、一族の他の年長者と舅と姑に仕えるために家にいることであると分かる。確かにこれは、仕事に集中するために、家庭での問題から男性を解放することを意味する。しかし、より重要なのは、結婚は運命なのだから、子どもを置き去りにし、義理の両親に付き添わずに外で働くことは、女性の「真の」務めを放棄するのに等しい、ということである。これこそが、謝艾倫が、戦後の国家の説明は結婚を神聖化し、「賢妻良母」を台湾の女性の「唯一の」役割として同定した、と主張する理由である。すなわち、女性の価値は父系家族に対して辛抱強くあり、自己犠牲的であるということにのみ存在したのである。より重要なのは、「母」が家族に対して行うように、女性が国家に対して自らを犠牲にすることが期待された、ということである<sup>[87]</sup>。それは、蒋介石が「[女]性は労働に励み、儉約し、「四維八徳」を理解し、国の「よき母」となり、子どもや夫の徳化によって偉大な人々を終わることなく指導することで国を助ける必要がある」と述べた通りなのである<sup>[88]</sup>。言い換えるなら、台湾の母親は、家族ではなく国家を自分自身の延長と理解する必要があるのだ。

ここではこれ以上は中華文化復興運動の内容に触れることはない。しかし、あるいは、蒋介石が中華民国という自分の国家を作り、儒教イデオロギー、人倫、性差による階層化によって現地民の意識を（再）植民地化することで中華民国を厳しく統制しようとした理由の説明としては十分といえよう。第一に、古代の「大」中国との結びつきを発見することで、蒋介石は自分が全中国の唯一正当な相続人であることを示した。家族イデオロギーと人倫を繰り返すことによって、蒋介石は、家長の下に組み込み、互いに協力的であることを



要求することによって台湾に秩序をもたらしただけでなく、国の父として人々の忠誠をも要求したのである。最後に、女性を家庭生活に閉じ込めることで、蒋介石は父系家族と家父長的な組織を通して女性を管理したのである。これらの特殊な「中国的」なものの見方やあり方は、国民の統合のために台湾の現地民に課せられたのだということが分かる。国造りの過程で国民党政権によってもたらされた「中国らしさ」についての説明は、結局、「文化的な覇権」の過程となるのである<sup>[89]</sup>。

国民党政権は現地の日本の影響や痕跡を根絶しようと努めたが、その主要な焦点は、家族倫理、道徳的な行動、性差間の関係、対人関係という、日本の植民地当局がほとんど手つかずにしたままの分野に当てられ、皮肉にも、日本の植民地時代に行われた文化マッピングを補強するのに役立ったのは、重大なことである。その一方で、台湾の人々は日常生活の行動の中では、非常に「日本的」なままであった。何故なら、本論の冒頭で紹介した豊富な民族誌的逸話でも明らかのように、日本的な要素は日常生活の様々な部分として組み込まれ、そのため、脱日本化政策と中国化政策によって容易に侵食されることはないからである。これに対して、中華文化復興運動は、家族イデオロギー、倫理、性差による関係と対人関係において、現地の人々を、一層「中国的」にした。より重要なのは、日本の入植者による日本化政策と国民党政権による中国化政策の結果としてそのように「定着された」文化マッピングが、李登輝が打ち出した「新しい」国家像のあり方を制約し、それによって1980年代後半以降の台湾の文化政策に対して強い影響力をもったということなのである。

## 9 文化マッピングから李登輝の文化政策へ

李登輝は1923年に台湾に生まれ、(一度は皇民となって)日本と米国に留学した。李登輝は、1984年に蔣経国から副総統に任命されたことで、政治の表舞台に登場した<sup>[90]</sup>。李登輝の任用は、1970年代以降の台湾を取り巻く固有な政治上の文脈によって実現した。

対外的には、台湾は1971年に国連加盟国の座を中華人民共和国に明け渡した。1972年には米国が一つの中国政策を宣言し、台湾の軍備の削減に合意し



た<sup>[91]</sup>。こうした事態は、国民党政府の政治的な正当性に大きな打撃を加えた。何故なら、国民党政府は、もはや中国全土の唯一の「正当な」政府を自称することができなくなったからである。対内的には、多数の暴動と1979年の高雄事件で証明されたように、中華思想的な説明では現地の反政府運動をもちや阻止できなかった<sup>[92]</sup>。

この内外二重の窮地によって、蔣経国は「台湾化」と変わらない政策に乗り出した<sup>[93]</sup>。1979年、蔣経国は台湾の政治の歴史の構造的な変化を象徴する新内閣の発足を発表した。すなわち、新内閣には、それまでに入閣したことのある人は誰もいなかった<sup>[94]</sup>。1986年には、戒厳令を解除し、国民党以外の政党の結成を禁止した状況を緩和するという決意を貫徹することに成功した<sup>[95]</sup>。民主進歩党は台湾史上初の野党として、1986年に活動を開始した。1987年、戒厳令が解除された<sup>[96]</sup>。まさに、こうした状況を背景として、蔣経国は、本省人である李登輝を副総統に任命したのである。

## 10 現地化

1988年、蔣経国の突然の死によって、李登輝が総統の地位を継承した。李登輝は中国本土の出身者から本省人への権力の移行を支援したが、彼はこれを「現地化」と名付け、政権を担当した間を通して、自らの国造りの鍵となる政治的な説明として用いた<sup>[97]</sup>。つまり、現地化とは本来、「台湾の人たちの固有な独自性、台湾の人々によって決められるべき特徴と中身を擁護する」<sup>[98]</sup>ことである。しかし、台湾の現地民の多くは、李登輝の現地化を「再日本化」とみなす傾向がある<sup>[99]</sup>。だが、何故であろうか。

1989年、李登輝は台湾省政府の解体による内閣改造を公表し、報道機関が台湾の「李登輝時代」と分類した時代が始まった<sup>[100]</sup>。1991年、中国本土の選挙区を代表して1947年に選ばれた、立法院と国民大会の発足時からの議員は、強制的に辞職させられた。報道と学校における閩南語の使用制限が解除された<sup>[101]</sup>。その他の改革には、中央銀行による手形の発行、1994年の日本のテレビ番組などの輸入解禁、地上波放送の支配の緩和が含まれていた<sup>[102]</sup>。最初の非政府系地上波放送である民間全民電視会社が放送を開始したのは、1997年

のことであった。

台湾に民主化をもたらしたと認められていることから、李登輝は「ミスター民主化」あるいは「台湾民主化の父」と呼ばれているが<sup>[103]</sup>、その一方で、われわれは、国民党支配の基盤を弱める民主化運動の背後にある、李登輝の動機に注意する必要がある。李登輝は、民主化が、独裁権力に基礎をおく国民党支配に致命的な結果をもたらすことを理解していたに違いない。民主主義の名を借りて現地化の要求を構想することで、李登輝は一般大衆と海外からの支援を得ることに成功したのである。

次なる問題は、李登輝の現地化の意味を明らかにする必要があるということである。明らかに、現地化の意味は、かつての国民党政権の中国化によって強く制約されている。現地化によって李登輝が意味するのは、中華思想的な歴史の見方は、台湾中心の歴史の見方に道を譲るべきだ、ということである<sup>[104]</sup>。李登輝は、台湾を中国の添え物としてではなく、むしろ中心に推し進めようという、台湾で広く支持されている変化の実現に努めた。しかしながら、李登輝は、自らの現地化の活動が、次のような前提に基づいていることを、ぬかりなく付け加えたのである。すなわち、その前提とは、文化的な相違のために、中国の独自性と台湾の独自性とは究極的には両立しえないという、台湾で普遍的な支持を必然的には得ることができない考えである。例えば、李登輝は2000年に、「台湾 [の] 文化は中国の文化の一部門ではなく」、「台湾の南部福建訛は福建の南部福建訛の一部ではなく、むしろ「台湾 [の] 訛」である」と公式に声明した<sup>[105]</sup>。明らかに、現地化についての李登輝の考えは中華思想的な観点の否定が特徴で、彼は、台湾中心であるだけでなく中国排除でもある「新しい」台湾の文化を築こうとしたのである。このように考えると、現地化についての李登輝の説明は、実は文化的分離主義、すなわち台湾を中国の文化から切り離そうという動きなのである<sup>[106]</sup>。しかし、現地化は単なる文化的分離主義者の計画ではない。すでに指摘したように、中国的な国民国家の考えは、人工的に作られた中国の文化的な起源との、歴史的、文化的、言語的、民族的な結びつきを前提としている。すなわち、文化と政治形態としての国民国家は、政治体制は独自の文化資源と文化遺産とによって支持されねばならないという意味での「文化的中国」の構想と不可分なのである<sup>[107]</sup>。逆もまた真である。

もし二つの異なる文化があれば、二つの異なる政府、ないしは二つの国民国家が存在しうるのである。従って、李登輝の文化的分離主義は、結局は政治的分離主義となる。まさに二つの場所の文化的な相違を強調することで、李登輝は中華人民共和国からの台湾の政治的独立性を正当化し、妥当化しうるのである。李登輝は、台湾に自らの国を築く際に、ある意味でかつての国民党政権の意図とは異なるものの、彼らと同じ論理を用いたのである。

しかし、このとき、台湾文化とは何であり、それが、中国文化という、過去数十年間にわたって国民党政権が主張した最上の物語とどのように違うのだろうか。1923年に生まれた李登輝にとって、「台湾の」文化は、1949年の国民党政権の登場に先立つ現地の文化であるようだ。しかし、すでにみたように、1949年以前の台湾では、日本の植民地として、日本の習慣、慣行、要素が強く強調されたのである。これこそ、まさに中国文化から台湾文化を文化する際に、李登輝が常に日本に向かった理由なのである。李登輝が現地の分化を中国の文化から識別するときに暗黙のうちに指し示すのは「日本の文化」ということになる。現代の台湾に残る日本の遺産は、現地の文化にとって「日本」をより一層好適な文化資源にした。従って、現地の文化に埋め込まれた日本的な要素は、李登輝が現地化についての見解を形成した際の、文化的な基盤となったのである。李登輝の現地化の行動は、国民党の中華思想によって制約されているだけでなく、日本の植民地支配の際の日本化政策によっても強く方向付けられている。すなわち、李登輝の現地化の活動は、まさに20世紀において台湾が味わった特異な経験によって生み出された、文化マッピングの結果なのである。結果として、李登輝の具体的な文化政策は、国民党政権の場合とは正反対に、脱中国化と再日本化へと向かったのである。

## 11 再日本化による脱中国化

現地化を確立するための日本の痕跡に対する李登輝の依存は、長年にわたる問題発言の中で明瞭に見出される。1994年に日本の新聞社による招待を受けたとき、李登輝は、日本語を流暢に話すだけでなく、親日的な指導者でもある総統と自称した<sup>[108]</sup>。同年、李登輝は「結局、国民党は外来の政権である」

と述べ、報道機関に衝撃を与えた<sup>[109]</sup>。さらに事実を述べると、李登輝は、22歳まで自分が日本人であったことを公式に発言している<sup>[110]</sup>。同様に、小林よしのりから公式取材を受けたとき、李登輝は「例を見ない決断によって、私は台湾の民主化を推し進めた。この目的を達成するためなら、私はすでにもっている権力を犠牲にしてもよい（中略）これら全ては、日本が残した遺産なのだ」と自らの心中を打ち明けた<sup>[111]</sup>。このようにみると、李登輝が試みたことは、かつての「日本の」入植者の美的感性と公理とともに現地民の心の中に住もうとすることなのである。自らの幼少期に服従した考え方とあり方を現代の台湾で繰り返し述べることで、李登輝は台湾の人々を中国本土の人々から区別しようとしたのである。現地化と「再日本化」との結び付きに共感しなかった台湾の現地民は多くなかったが、台湾を中華人民共和国から分離させることこそが、まさに李登輝が利用した戦略なのである。

李登輝の個人的な権力を日本の植民地支配や国民党政権と比べることはできないが、それでもなお、彼は様々な文化政策によって現地民の心の中に住もうと試みた。李登輝は1988年初頭から12年間にわたって統治した。李登輝政権下で定められた多くの法令は、直接的あるいは間接的に日本と関係していた。こうした法令は、全体としては日本の存在感を高め、具体的には、日本の大衆文化を台湾でより接触しやすいものにした<sup>[112]</sup>。例えば、1992年には、日本のマスメディアに対する制限が解除された<sup>[113]</sup>。すなわち、日本の映画、漫画、ドラマ、音楽は、もはや台湾では禁止されたり制限されなくなったのである。三つの放送局における日本語の使用と日本の番組と音楽の放送の禁止は、1993年に解除された<sup>[114]</sup>。その間、台湾における衛星放送と有線テレビは、1988年と1993年の有線テレビ法と衛星放送法によって、それぞれ公認された<sup>[115]</sup>。これ以降、地上波放送と有線テレビで放映された日本の娯楽番組とテレビドラマは、台湾の人々の間で新たな話題をさらった。

現地の人々が日本のテレビドラマを称賛したことで、今度は台湾で日本の番組の海賊版が次々と生み出されたが、当局は暗黙のうちにこの行為を無視したのである<sup>[116]</sup>。1990年代の西門町の都市計画で、李登輝政権は西門町に日本の大衆文化の全ての様式を注入し、それによって、西門町は最終的には現代の台湾における哈日都市（哈日とは「日本」に熱狂する人々を指す現地の

言葉である）として再生したのである<sup>[117]</sup>。

## 12 結論

本論では、現地の社会生活の異なる面に日本の遺産と中国の影響が明瞭に描かれている台湾を観察することで得られた特定の文化的な光景が、台湾における複雑なアイデンティティ政治の結果であるということを議論した。日本の植民地主義という歴史的背景と「国民国家」という文化的概念を考えると、台湾におけるアイデンティティ政治は、異なる文化が特定の独自性を話すために操られた、文化の政治となったのである。まさにこの文化の政治こそが、本論の冒頭で概観した文化マッピングに寄与したのである。

日本は台湾を50年間支配し、台湾の現地民に日本の日常生活の様々な様式を強制したが、家族イデオロギー、倫理、宗教、性差による関係の大部分は強制の対象から除外された。その主な結果は、日本的な要素が新しく生まれた台湾文化の日常生活となったが、その一方で、中国の影響は家族生活や倫理的な生活の主流として残る、というものだった。このようなマッピングは、新たに獲得した台湾という地に新しい国家を築こうとした国民党政権時代に、再度強化された。「国民国家」についての中国の概念を背負うことで、国民党は標準化された伝統的な中国文化、とりわけ家族、倫理、性差にまつわる関係を現地民に強制したが、それは、古代中国の国家と自らとの歴史的、文化的な関係性を誇示し、それによって中国全土の政府としての政治的な正当性を証明するためであった。実際には、国民党政権が家族イデオロギー、人倫、対人関係に焦点を当てることで、日本の統治時代に作られ、不変であった文化マッピングを塗り替えたのである。

面白いことに、こうして作られた文化マッピングは、今度は、1980年代後半から李登輝が台湾という自らの国を建設し、独自の文化政策を打ち立てようとしたときに、同じように彼を束縛した。台湾における国家についての見解を構成する際、李登輝には、かつての国民党政権の中華思想的な文化政策から台湾を区別する以外の方法がなかった。台湾を、最上の物語としての中国からより一層分離させるために、李登輝は全体としては日本を、具体的には日本語

化を復活させた。なぜなら、日本的な要素は「在来の」台湾文化と不可分な部分をなしていたからである。つまり、李登輝の文化政策は、国民党の文化政策の否定を特徴とするばかりでなく、日本の植民地主義者の文化政策によっても特徴付けられる。いわゆる在来の「台湾の」文化の再現は、日本の植民地主義の現実性だけでなく、「国民国家」という文化的概念によっても特徴付けられることが分かる。しかし、こうして再現された現地の文化は、今度は再び文化政策に影響を与える。その結果、李登輝は台湾という独立した国家を築くために、全体としては日本に、具体的には日本の文化に依存したのである。文化政策と文化マッピングの関係は、決して一方的ではなく、弁証法的なのである。

#### 注

- [55] Winckler, 30; Thomas Gold, "Civil Society and Taiwan's Quest for Identity," in *Cultural Change in Postwar Taiwan*, eds. S. Harrell and C.C. Huang (Boulder, Colorado: Westview Press, 1994), 60.
- [56] 楊聰榮、「文化建構與國民認同：戰後台灣的中國化」、碩士論文、國立清華大學、1992年、26頁。
- [57] 黃大受、『台灣史綱』、台北：三民、1993年、24頁。
- [58] 羅慧雯、「台灣進口日本影視產品之歷史分析」、碩士論文、國立政治大學、1996年、24頁。
- [59] 菅野敦志、「中華文化復興運動と「方言」問題（1966～76年）—マスメディアの「方言番組制限」に至る過程を中心として—」、『台湾学会報告』第5号、2003年、3頁。
- [60] 黃秀如、「台語片的興衰起落」、碩士論文、國立台灣大學、1991年、35頁。
- [61] 羅、前掲論文、23頁。
- [62] Fu-chang Wang, "Why Bother about School Textbooks?: an analysis of the origin of the disputes over renshi Taiwan textbooks in 1997," in *Cultural, Ethnic, and Political Nationalism in Contemporary Taiwan: Bentuhua*, eds. John Makeham and Hsiao (New York: Palgrave Macmillan, 2005), 60.
- [63] Warren Tozer, "Taiwan's 'Cultural Renaissance': a preliminary view," *China Quarterly* 43 (1970) : 82.
- [64] 林果顯、「「中華文化復興運動推行委員會」之研究（1966-1975）」、碩士論文、國立政治大學、2001年、47頁。
- [65] Chun, Allen, "From Nationalism to Nationalizing: cultural imagination and state formation in Postwar Taiwan," *Australian Journal of Chinese Affairs* 31 (1994), 54.
- [66] Chun, Allen, "Democracy as Hegemony, Globalization as Indigenization, or the "Culture" in Taiwanese National Politics," *African and Asian Studies* XXXV (no. 1 2000), 9.
- [67] 楊、前掲論文、45～49頁。
- [68] 林果顯、前掲論文、82頁。

- [69] 同、75 頁。
- [70] 楊、前掲論文、41～42 頁。
- [71] 林果顯、前掲論文、76 頁。
- [72] 同、58 頁。
- [73] 同、51 頁。
- [74] 中華文化復興運動推行委員會、「中華文化復興運動の實踐與展望」、台北：中華文化復興運動推行委員會、1977 年、7 頁。
- [75] 楊、前掲論文、45 頁。
- [76] 中華文化復興運動推行委員會、2 頁。
- [77] 同、11 頁。
- [78] 同、30 頁。
- [79] 同、3 頁。
- [80] 同、28 頁。
- [81] 同、2～3 頁。
- [82] 同、7 頁。
- [83] 同、27 頁。
- [84] 林果顯、前掲論文、86 頁。
- [85] 同、53 頁。
- [86] 同上。
- [87] 謝纓倫、「誰の婦女政策？我國婦女政策中の「婦女」論述分析(1949-2000)」、碩士論文、台灣大學、2000 年、6 頁。
- [88] 同上。
- [89] Chun, "From Nationalism to Nationalizing," 56.
- [90] Richard, C Kagan, *Taiwan's statesman: Lee Teng-Hui and democracy in Asia* (Annapolis, Md: Naval Institute Press, 2007), 94.
- [91] Rubinstein, "Political Taiwanization and Pragmatic Diplomacy," 438.
- [92] Kagan, *Taiwan's statesman: Lee Teng-Hui and democracy in Asia*, 94.
- [93] Ibid.
- [94] 蘇顯星、「戰後台灣文化政策變遷歷程研究—歷史結構分析」、碩士論文、國立臺南師範學院、2002 年、38 頁。
- [95] Ramon Myers, "A New Chinese Civilization: the evolution of the Republic of China on Taiwan," *China Quarterly* 148 (Special issue: contemporary Taiwan, 1996): 1079.
- [96] Parris H. Chang, "The Changing Nature of Taiwan's Politics," in *Taiwan: beyond the economic miracle*, eds. D.F. Simon and M.Y.M. Kau (London: M.E. Sharpe, Inc, 1992), 32.
- [97] 王致堯、「中國意識在台灣社會政治發展過程中之角色分析 (1988-2000)」、碩士論文、中國文化大學、2002 年、67 頁。
- [98] Makeham, "Introduction," 1.
- [99] 王致堯、前掲論文、67 頁。
- [100] Chang, "The Changing Nature of Taiwan's Politics," 33.
- [101] Rubinstein, "Political Taiwanization and Pragmatic Diplomacy," 454.
- [102] 羅、前掲論文、23 頁。
- [103] Kagan, *Taiwan's statesman*, 107.
- [104] Makeham, "Introduction," 11.
- [105] Huining, Zhuang; Haixia, Huang, *World News Connection Hoping for an Early Completion of the Great Cause of National Reunification. China's NPC Deputies, CPPCC Members on Cross-Strait Reunification Viewed* (March 19, 2001)



- [106] 楊、前掲論文、70 頁。
- [107] Weiming Tu, "Cultural Identity and the Politics of Recognition in contemporary Taiwan," *China Quarterly* 148 (1996) : 1124.
- [108] 雷鳴、『李登輝は日本人嗎？七年總統内幕大公開』、台北：漢斯出版、1995 年、16 頁。
- [109] 徐淵濤『日本浪人岩里政男：再替李登輝卸妝』、台北：衛視中文台、2001 年、181 頁。
- [110] Kagan, *Taiwan's statesman*, 108.
- [111] 徐、前掲書、181 頁。
- [112] 黃邦如、「前總統李登輝の対日観についての研究」、碩士論文、長榮大學、2004 年、74 頁。
- [113] 羅、前掲論文、132 頁。
- [114] 同、126 頁。
- [115] 吳介弘、「民進黨執政後之台日關係 - 延續與變遷之探究 (2000-2005)」、碩士論文、國立台灣大學、2006 年、37 頁。
- [116] 羅、前掲論文、141 頁。
- [117] 遲恒昌「從殖民城市到「哈日之城」：台北西門町的消費地景」、碩士論文、國立台灣大學、2001 年、52 ~ 53 頁。

#### 参考文献

- [1] Bourdieu, Pierre. *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge, Cambridge University Press, 1977.
- [2] 中華文化復興運動推行委員會、「中華文化復興運動的實踐與展望」、台北：中華文化復興運動推行委員會、1977 年。
- [3] 張宏銘「有線電視成人頻道經營探討」、碩士論文、國立中山大學、2004 年。
- [4] 張憲杉「從中美兩有線電視制度之制定 - 探討對成人節目之規範與管理」、碩士論文、中國文化大學、1999 年。
- [5] Chang, Parris H. "The Changing Nature of Taiwan's Politics," in *Taiwan: beyond the economic miracle*, eds. D.F. Simon and M.Y.M. Kau, 25-42, London: M.E. Sharpe, Inc, 1992.
- [6] 陳大元、「日治時期臺灣教化輔助團體之研究」碩士論文、東海大學、1999 年。
- [7] 遲恒昌「從殖民城市到「哈日之城」：台北西門町的消費地景」、碩士論文、國立台灣大學、2001 年。
- [8] 江智浩、「日治末期 (1937-1945) 台灣的戰時動員組織—從國民精神總動員到皇民奉公會」、碩士論文、國立中央大學、1997 年。
- [9] Chou, Wan-yao. "Remaining Oneself a True Japanese: one aspect of the Kominka Movement, 1940-1945," in 『日據時代台灣史國際學術研討會論文集』、台北：國立台灣大學、1993 年。
- [10] Chun, Allen. "Democracy as Hegemony, Globalization as Indigenization, or the "Culture" in Taiwanese National Politics." *African and Asian Studies* XXXV, no. 1 (2000) : 7-27.
- [11] Chun, Allen. "From Nationalism to Nationalizing: cultural imagination and state formation in Postwar Taiwan." *Australian Journal of Chinese Affairs* 31 (1994) : 46-69.
- [12] Comaroff, John and Jean Comaroff. *Ethnography and the Historical Imagination*. Boulder, San Francisco and Oxford: Westview Press, 1992.
- [13] Gates, Hill. *Chinese Working-class Lives: getting by in Taiwan*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1987.
- [14] Gold, Thomas. "Civil Society and Taiwan's Quest for Identity," in *Cultural Change in Postwar Taiwan*, eds. S. Harrell and C.C Huang, 47-68, Boulder, Colorado:

Westview Press, 1994.

- [15] 何義麟、「皇民化政策之研究—日據時代末期日本對台灣的教育政策與教化運動」、碩士論文、中國文化大學、1986年。
- [16] 謝纓倫、「誰的婦女政策？我國婦女政策中的「婦女」論述分析（1949-2000）」、碩士論文、台灣大學、2000年。
- [17] 徐淵濤『日本浪人岩里政男：再替李登輝卸妝』、台北：衛視中文台、2001年。
- [18] 黃邦如、「前總統李登輝の対日観についての研究」、碩士論文、長榮大學、2004年。
- [19] 黃正治、「日據五十年統治對光復後臺灣之影響」、碩士論文、中國文化大學、2002年。
- [20] 黃秀如、「台語片的興衰起落」、碩士論文、國立台灣大學、1991年。
- [21] 黃大受、『台灣史綱』、台北：三民、1993年。
- [22] Kagan, Richard, C. *Taiwan's statesman: Lee Teng-Hui and democracy in Asia*. Annapolis, Md.: Naval Institute Press, 2007.
- [23] 賴建國、「台灣主體意識發展與對兩岸關係的影響」、碩士論文、國立政治大學、1997年。
- [24] 雷鳴、『李登輝是日本人嗎？七年總統內幕大公開』、台北：漢斯出版、1995年。
- [25] 廖楮彬、「多階層殖民下台灣文化實體之考察」、碩士論文、國立台灣大學、2002年。
- [26] Lin, Sylvia Li-chun. "Toward a new identity: Nativism and popular music in Taiwan." *China Information* 17 (2003): 83-107.
- [27] 林果顯、「「中華文化復興運動推行委員會」之研究（1966-1975）」、碩士論文、國立政治大學、2001年。
- [28] 林雅鈴、「日本皇民化政策與台灣文學的反動精神」、碩士論文、國立東華大學、2003年。
- [29] 羅慧雯、「台灣進口日本影視產品之歷史分析」、碩士論文、國立政治大學、1996年。
- [30] Makeham, John. "Introduction." In *Cultural, Ethnic, and Political Nationalism in Contemporary Taiwan*: Bentuhua, eds. John Makeham and Hsiao, 1-16. New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- [31] Myers, Ramon. "A New Chinese Civilization: the evolution of the Republic of China on Taiwan," *China Quarterly* 148 (Special issue: contemporary Taiwan, 1996): 1072-1090.
- [32] 中山善史、「日治初期臺灣地方衛生行政：以衛生組合為中心探討」、碩士論文、淡江大學、2007年。
- [33] 蘇顯星、「戰後台灣文化政策變遷歷程研究—歷史結構分析」、碩士論文、國立臺南師範學院、2002年。
- [34] 菅野敦志、「中華文化復興運動と「方言」問題（1966～76年）—マスメディアの「方言番組制限」に至る過程を中心として—」『台湾学会報告』第5号、2003年、1～20頁。
- [35] 戴美慧、「戰後台灣文化政策與文化發展關係之研究—以文化多元主義為觀點」、碩士論文、國立臺灣師範大學、2003年。
- [36] 滝沢利行、「近代日本における社会衛生学の展開とその特質」『日本医史学雑誌』第40卷第2号、1994年、111～132頁。
- [37] 胎中千鶴『葬儀の植民地社会史—帝国日本と台湾の〈近代〉』、風響社、2008年。
- [38] Tozer, Warren. "Taiwan's 'Cultural Renaissance': a preliminary view." *China Quarterly* 43 (1970): 81-99.
- [39] Tsai, Hui-yu Caroline. "One Kind of Control: the Hokō system in Taiwan under Japanese Rule, 1895-1945." PhD dissertation, Columbia University, 1990.
- [40] Tu, Weiming. "Cultural Identity and the Politics of Recognition in contemporary Taiwan." *China Quarterly* 148 (1996): 1115-1140.
- [41] 王致堯、「中國意識在台灣社會政治發展過程中之角色分析（1988-2000）」、碩士論文、中國文化大學、2002年。
- [42] Wang, Fu-chang. "Why Bother about School Textbooks? : an analysis of the origin of the disputes over renshi Taiwan textbooks in 1997," in *Cultural, Ethnic,*

*and Political Nationalism in Contemporary Taiwan: Bentuhua*, eds. John Makeham and Hsiau, 55-102, New York: Palgrave Macmillan, 2005.

- [43] 王曉波、『走出台灣歷史的陰影』、台北：帕米爾、1986年。
- [44] Winckler, Edwin A. "Cultural Policy on Postwar Taiwan," in *Cultural Change in Postwar Taiwan*, eds. S. Harrell and C.C Huang, 22-46, Boulder, Colorado: Westview Press, 1994.
- [45] 吳介弘、「民進黨執政後之台日關係—延續與變遷之探究（2000-2005）」、碩士論文、國立台灣大學、2006年。
- [46] 楊聰榮、「文化建構與國民認同：戰後台灣的中國化」、碩士論文、國立清華大學、1992年。
- [47] Zhuang, Huining, Haixia, Huang. *World News Connection Hoping for an Early Completion of the Great Cause of National Reunification. China's NPC Deputies, CPPCC Members on Cross-Strait Reunification Viewed* (March 19, 2001).